羈旅湯錄

下之卷

ル 4
3377
3

門 ル 4
號 3377
卷 3

門 ル名 3
號 421
卷 3

壬戌羇旅漫録巻の下

蓑笠漁隱遺稿

坦庵居士正幹校

(九十九) 契沖阿闍梨墓誌

契沖師の墓を。大坂飼さ〜町圓珠庵ふかり。碑面ふ
圓珠庵契沖阿闍梨之墓とのこかり〜。年月畧傳等ふ〜。傍
らふ碑ありく。是を後ふ水戸の安藤爲章の建〜所ふり。傳
記大ろ〜年山紀聞ふ志るしたる所ふ仝〜。故ふろ〜来らも
(百) 家隆卿の碑 附貞柳碑の噂
家隆卿の碑を。大阪新清水のくろ〜ら。田の畔ふ〜高き所ふ松
あり。その下ふあり近年安井の門主建たまふ所ふり
同所新清水の下ふ。鯛屋貞柳の碑あり。これも二十五回忌のこと紀
門人のたてし〜ものなりつ。つもも後人の作ゆゑめづら〜ふらも

契沖字ハ空忠姓ハ下川氏又名ハ元全美長衛と称ス摂州尼崎城主青山幸利ふ仕ふ寛永庚辰契沖尼崎ふ生る元禄十四年正月寂ス年六十二年山紀聞巻尾ニ契沖行実あり貞柳ハ大坂の人油煙齋と号ス八幡山の信海の門人ニシテ俳諧狂歌ふ

名高一享保十九八月十五日没を年八十一

出雲守忠朝ハ、忠勝ゞ二男あり、元和元年大坂夏陣ゑ従者二十余人と天王寺口ゟ向ひ〳〵戦死を年三十四

紹鷗ハ堺の人姓源氏武田信光の後あり、左ねを きて同じ武田の末あれバなるとてゞ今ハ野とあり

ゟ〳〵と詠じ自ら氏を武野と改む、禅ゟ参ゝ、和歌を好ゞ茶を嗜む、一閑居士と号を永禄元年五十三にて没を、茶道を利休ゑ傳ふと云

ゟ〳〵うつ〳〵来らぞ

(百一) 元和戦死の古墳

七月晦日生玉明神。高津の社ゑ詣を。夫より一心寺ゟいつゝり。本多忠朝朝臣の墓ゟ詣を。墓の三方ゑ従者討死のゆの十三四輩の墓あり。外を板ゟ〳〵構ひ〳〵猥ゟ人を入まぞ。この寺ゑ元和討死の石塔あゝゝあり。茶臼山の御陣跡。一心寺のゝゝゝらゟあり。小松がひあげまり。

(百二) 紹鷗ゞ墓 附千家の墓の噂

泉州堺。南周寺ゟ紹鷗の墓あり。鑄代百銭を寺僧ゟ與ふまぶ則墓ゟ謁せ〳〵む。詣人墓前ゑもむ〳〵ば。土中おのづゝら茶とたろる聲ありとゝふ。是を墓の後ゟ四ゟる呼ありゝ。そもゝ自然と風の吹入るゝ。これ寺ゑ利休をゝぶめ千家代々の墓あり。

(百三) 鬼貫ゞ傳 附評 此條蓑笠雨談ゑ載られば省く

(百四) 大坂市中の總評

大坂を眉毛なき女も。髪を多く嶋田ゆり。又嶋田ゑ〳〵ぎるもけを。〳〵髷両ゝびあり。〳〵つ山をまれあり。髪の圖前ふゝゝゝ

○大坂の市中茶店あ〳〵。渇を〳〵る人を途中茶ゑこゆゝるあり。夜行を〳〵るゟいゝゝゟぐ紀茶店あ紀ゆ名。格別草臥るあり。川筋ハ船を岸ゑ繋ぎあるき。ゝゟ〳〵酒肴を鬻ぐ京の河原の涼ゝを かゝゝり。夜店ハ大〳〵提灯を出を。京をゝけ行燈あり

○七月廿八日。大坂御城の大手先を徘徊〳〵。天満天神ゟ詣を。近日の大水ゑ天満橋天神ぞ〳〵落く。難波橋より往来を。

○同日坐摩の社ゑ詣を。社地りゝゝせ物芝居茶店等あり。

○天王寺を大門のゝ殘りゝ。一圓焼土のゝ殘まり。天王寺の傍

新清水より。はるゝ西海を眺望せまゝば。左よりかつらき山。金剛山。二丈ゞ嶽。むゝふゝ聳。淡路島山まるゝふゝゆるなり。

○男子の髪の風を。ゑゝびゝり鬚多ゝ。圖を前ゝ見えたり羽織を京よりも短ゝ。

○新町橋の大サハ。江戸のあやぢ橋わどもなるべゝ。あれ橋の上半分を商人ふゝ或を房藥をうるゝせ。或を煮つけ看水巣子のたゞひをうるもの。おのゝ〳〵やたゝふゝせを出ゝ。橋の上を真半分ふゝて。一ッを商人のやゝふゝすゝふさげ。往來甚ゞ混雜もきどゝ。高言をつゝふゝもすゝ口論もあゝ。大坂の市人つゝふゝ風炉ふゝ釜ふゝどゝけ或を箭ふゝどゝふきて。万事高上ゝえもるところの地の一風ふり

○順慶町の夜見世ゝそめさもるゝざあると。暮より四ッ時まで八十町餘兩側ゝな商人ふり。故ゝこのひあるを夜出る人多ゝ。

○京も大坂も夜ゝを。筵の上ゝ古き手道具もべゝいろゝの古器ふを出ゝ。ちゝきゝ行燈を横ふゝて。前へうつむけ火を點ゝ。夜中ふこのゝるゝえせゝてゝもあもゝど。喧呶爭論あゝゆるふ。賊の愁もふきゝるやゝゝもを夜ゝえせゝゝ。京を大和橋辺夜ゝえせ多ゝ

○新町の格子先ゝゝ古物ゝるせをゝるべ。妓樓のゝえせ先ゝゝ櫛のんざゝふどゝるゝの商人出ゝもと。江戸人ゝをめづらゝ。

○大坂を食物の外。店うゝゝふゝもゝふゝ。故ゝ商人の店ふど昏ゝ障子をゝゝゝおゝ店多ゝ。ゝなおゝゝ商ひ多き故ふり。

○雪踏（セッタ）をうるゝゝは穢（エト）多ふゝ。橋詰ゝふ祇店（ヤダイミセ）あり。素人の店ふ雪踏ふゝ。皮のつゝざる女のうゝ附草履と。下駄足駄をうるゝえせもふゝふあり。京もこれを同ふ

○堂島の朝市。ゝも又勢ひあるゝめきゝ。

○一体大坂はちまたせまく。俗地まく。みるべきものなし。京の市中に木戸なし。大坂は一町〳〵に木戸あり。木戸の柱にふだをうちつけ。是へ町名をしるしおく。橋〳〵にも札ありてその名をしるしたり。橋に名をしるすことはめづらし。木戸に町名をしるすことは近ごろのことなりといふ。

○大坂にてしるべき神社は。座摩。生玉(いくたま)。天満。高津。等なり。天王と稲荷は所々にあり。稲荷も又神社しのゝるごとくみゆるもの多し。只天王寺と住よしのみ懐古の地なり。それも天王寺は去年の火災に礎(いしずゑ)のみ残れり

○大坂によきもの三ツ。良賈(オホアキビト) 海魚 石塔 あしきもの三ツ 飲水(トモ) 鰻鱺(ウナギ) 料理

うなぎを小串のまゝにて京の若狭うなぎにおとれり。大庄しといふ店。鰻鱺をうることおびたゞしかりしよし。今年なありて

店をしまひぬ。その外料理店數軒あれど江戸人の口にはあはずぞ。うつむ瀬も塩梅(あんばい)名ほどには高からず

○大坂の市中犬猫すくなし。是は穢多主なき犬猫をつまみゆき。皮を剥(はが)んためなり。犬子をうめば一両月たちて穢多ぬすみとりてゆく。老犬は穢多をしりてことをしれば大に吼かゝりて。屠兒の手にのらず。故に小犬のうちつまみゆくなり。主ある犬を捕ることをゆるさず。京にも犬猫すくなけれども大坂はいよ〳〵すくなし

只夜行に犬糞のおそれなきのみ第一の好景なり。大坂の穢多村は江戸浅草の新町よりも大きなり、家作りいづれも立派なるもの、しるまでもなく左右の棟をひとしくまうけてあるなりぞ。一方は一尺ばかりづゝさがりし、凡十三層、川にかゝり居る大船つなげり八九艘、これまでの穢多村交易の商船なりといふ

○大坂の人氣は。京都四分江戸六分なり。倹(ケン)なるやうなれば京を学び。活(クワツ)なるやうなれば江戸にならふ。しかれども實氣なることは京にま

追書
盧橘が著述、度々書肆損をさせ、こもだ後まハ絶て行まゝ、京まうつり住ミ又大坂口縄坂まて賣トせしが文化辛未ゐ〳〵ゐ
まもなくなり、

さもあり。一體人氣のよく一致もるところあり。あまい土地のせまれゐなるべし。

○大坂を今人物なし。兼葭堂一人のミ。是もこの春古人となりぬ。玉山が畫を書肆のゝ珍重して。雅人をこれを識れり。又祖仙ハ猿の字生をよくもそ。その外畫工あるどいくらもあるもど京ゐ及ばず。盧橘(ろきつ)といふ人を。筆耕と戲作をして。家内五人を養ふ。是も筆耕ゐ作者をもゝく渡世ゐもる人。大坂ゐ盧橘壹人ゐり。ゐ為人予逗留中大ゐ深切ゐ為てまする。戲作のことをもて妻子を養ふしと。廣き江戸ゐさへなるもべ。大坂を書肆の富る地ゐるとらまるべし。

○大坂を賣藥店多し。首より上の妙藥。腰より下の妙藥などいふ。招牌(かんばん)を出しもくゐ世ゐらもなり。

○大坂を時を太鼓ゐくうつ。あるまうて夜の五ッハ五ッ半頃ゐうつなり。是を御城の太鼓を遠く隔てゐうつ故。遠き町を次第ゐ時がおくれもるなり。新町を夜九ッようつ。是を大太鼓ゐり。江戸吉原まてひけ四ッといふを。新町ゐてハ太鼓まで。太鼓ゐり後ゐどいふ。但し新町の九ッを世ゐの八ッなり。

○天王寺の地中ゐ。催金文七が奉納の繪馬(ハしゐ合戰の図)あるゝ〳〵吹しゐ名人ゐなづゐるゐ。去年天王寺の燒失の時紛失して今ゐなしといふ。盧橘が話ゐ。實を文七が奉納の繪馬ゐなりもど。名前別もくゐ餘人の奉納ゐしもあるといふ。

(百五)難波雀(なゐはすゝめ)の抄書(ぬきがき)附西鶴名殘(なごり)の友

難波雀 延寶七己未陽月下旬吉備國水雲子著小本一冊 俳諧師所付の部ゐ

一天滿碁盤屋町　西山梅花翁　一鎗屋町　井原西鶴

歌學者の部より　一江戸堀　下河邊長流

又屋敷名代の部より　一細川越中守殿　名代　天野屋利兵衛

甚だ珍書なり。大坂にて見たり。予も名古屋にて。諸買物三合集覽とのふ小本を得たり。元禄五年の版なりその名もむ紀難波雀より似たり

○西鶴没後。信友園水京師より來り。七年その庵を守る。西鶴名残の友（合本五冊）西鶴草稿のまゝ出板せ。その事園水が序文ふ見る。俳諧師の傳をかの〳〵書たるものあり。田宮氏所藏ふ〳〵を予まねこゝる。

○長堀銅吹所づゝや所望郎席

又さらひとりわ〳〵の吹革もそふてふ冨貴と称する侍ふよ

（百六）住吉附經堂在の松小町茶屋

八月三日夜前より雨ふりけるが晴てやがて出ぬ。いざや住よしへ詣んとて。書肆大野木氏やとて船を用意して（大坂あてやとて紀〳〵称たるりの江戸のやうに）ぶらふ予といざなひ。心齋橋より乘出し〳〵。住吉明神へ參詣ス。たるとの小住吉の濱より見もぶ。武庫山右より遠く聳へ。淡路嶋むかふよりそそ。一の谷ふどもろふ見る。岸の姫松を數百本千とせの緑をたらもも〳〵。四社の御神上久〳〵尊く。社前のそり橋。角柱の石の鳥居。同石の舞臺。誕生石。その外攝社を巡拜せ。浅澤の杜若。車〳〵の櫻。もろいなすけもどそれ跡をたづね。御田の稲を青〳〵。いまだ花をむもそぶ。神宮寺奥の天神巷〳〵拜し畢〳〵。酒樓伊丹屋より酒食をとゝのへ。

〳〵中をたらうらみん經堂〳〵出ぬ。住よしの岸ふあるくて

此辺より竹本住太夫が出〳〵ふの家。伊丹屋の二三軒ふ有まあり

夫より難波屋の松見よ由ゆ行り。社より西の方三町ばかりふたり。茶店の庭木あり。つくり木なれども。四方二十軒ばかりはんまるふ笠の如く茂生す。木の高サ一丈とりてどもをば五六尺あるべく。ひきくくうゑ。屋ふかりてその三尺。或を二尺余もをかるをかり。あふくあづき餅をうり。又松のうちを紙まきてうるをすり。

○とやせんべいを。江戸まくいふふまきをせるり。かるやれの形あるいはものあり此辺あるるやとつくせしてこのせんべいを竹馬とうる。本家は

とやハ堺よりり。

○社前の西北の角よ。小町茶屋とうふあり。尋常の茶店あり。

この茶店よこのぎり。長き柄杓のうつよ茶碗をのせて茶をとまをん。

小町茶屋俗ごうらとまり松のあ

帰路も船ばかりをもべ。天下茶屋へをゆのぞ。この日ありをゆ

いくくて日くをぬ。あをたぶくく舟まのり。なすがをふ沂まべ船おそく。左右の岸辺よ鈴むくのをぶくく舟くくまあぶぶ。をてのを

まくくし。又一住奥ふり。前ぶをを島をく伽やらふの船をあひぬ。お内

裏をふりをを俗を若ぶを島くふ伽やらふハ舟まんぢうあり土地の人をぴんまをくふ

その夜九ッぶろり。船心齋橋よつをぬ。この日船中秋暑をうれ。

つくく奥ばかりくををぬ。

（百七）松明の施行

大坂をつをふ河水を飲水ををる而ををふ。近日近江の大水ふ

河水濁くく飲むをくぶ。故よ大坂のりの今道村増井の清水。

をを外天王寺辺の井戸の水を汲ふゆくをの。夕方より引も

きくを今道辺の人家の前よ。夜を大挑灯を出くく田の畔まハ

松明をとりくく。松中水を汲をの助をとををぶくく大坂ハ氣が

さるる示すて。まけどたすくひの商買等。大水ゆくく落くる小橋
い。官府へねがふく。自身一個の入用まく。仮橋をうけ。無銭と書
し挑灯ふど出しおくうのこと何ふまくば。人々きそひくか
そくこあり。

(百八) 浪華妓院の噂

大坂の妓楼を。新町と。島の内。曾根崎。よろくくうる。嶋の内を
うえせ付なし。新町ハうえせ付あり。太夫天神をうえせをもらぞ。鹿
子位と稱するものいくふうえせをする。天神あるうえせ天神とそうえせと
うるものあるもと是を下品ふりうえせ
の格子も兼未まく。間口三四間ようぞ。妓も十人よりハ多らら
ぞうえせをもる妓ハ。ちひきぞ蒲團を敷く居る。又ちこ孫うけを
し。居せんをうるくうえせるもあり。衣類ハ紹のゆゆうぶ多し。帯を
ひちりめんのちぐぞなり。店先ハ老婆。或ハ髪つき居て客の

湊標を大坂新町の細見記なり寛政十年再版ぞ

袖をひく。天神のあるうえせハ。天神うえせとく別なり。
○凡揚屋の廣くく奇麗なること大坂ハ比ものなし。揚屋ハ九
軒ハ限る。そ外餘を茶屋と呼屋なり。こもくふらうれば
ちくふ畧せり。(新町ハ二方ハ口あり堺筋ハ口なり)

(百九上) 太夫天神のかし借り

太夫天神を夏ハ小袖なり。帯を(図)如此横ふ長く結ぶなり。
つまを右の方へまるくくと出しておるなり。新町まく太夫天神をか
うくうるこのみてあり。京の島原又ハ大坂揚屋ようかくふやもべ。客ある妓も
必来る。太夫ハ引舟女郎のつぎくくうるなり。天神ハ禿の十
二三歳ぞうなるが。廣服のゆくあて。初のく一人ハ一人づゝ付そひ来
る。客を席の正面ハ坐せ。末社を左右ハ列ち。叔赤前垂の仲居の
ちくうきくたるもの一人。盃臺ハ盃をのせ。ゆきの入口なり一二

間あるにはなく居る。又その向ふに一人硯と紙をもちてひかへ居る。是を太夫天神の名をしるすものなりさすが太夫にても天神にても。おのおの坐敷の障子の外に佇む時。かの禿誰さんへと妓の名をよぶ。その時仲居がしておとづれをいふ。いづれも一洞に聲高し時に太夫しとやかに立出。盃臺の前にきたち。臺につきあたるわざなりうちかけの中程を。右の方帯の結目の下へかいこみ居りながら。左りの裾を折りて左りの方へ一尺ばかり寄りてちやふすわる。この時仲居が盃臺を太夫の前につきおしつけ何堂の誰さんと高聲によぶなり。その時太夫しとやかに小盃をとりあげ。客の方をみやく。持たる盃をもつたりと臺の上におく。仲居その盃臺を一尺ばかりつゝと客の方へおしやり。又高聲に誰さんと妓の名をよび。臺をもとの所におく時。太夫つとたちてかへる。その所作まことにしとやかなるものなり。何人(ニン)にても所作はみな同じ。

天神はすこしかろきのみ。但太夫と天神と一所にいれかはるぞ。天神をかりにてみる時は天神ばかりなり。取かりたる太夫一旦のことならばゆりて後。書留ある名前をみてよぶべき太夫を名ざしてやれど。客あるものは来らぬぞ。客なきはまだ程なく来るなり。

○太夫天神は夏も小袖うちかけなり。繻子或は綾などの縫あるうちかけ二ツ三ツ重ねて出る。帯は金襴天鵞絨(びろうど)おのおの差(しな)あり。天神は江戸吉原の坐敷もち位のものなり。中には縮緬の裲襠(ウチカケ)きたるもあり。又顔色も一様にはあらぬぞ。呼びむかへて坐蒲に来まべ。直に客のうしろに坐るぞ。床に入るまで了鬘(カムロ)付そひ居て。或いはあふぎ或はたばこをつけ。左右の用事を悉くなす。江戸の妓は客のむかへにまつまでこの里の妓は客のうしろへまはるゆあるに席上にて顔色どころにあらし 扱閨房に入まで。件の衣服を着かへ。越後ちぢみ。或はちりめんの単物など。夏の衣服になをして臥

を。凡房中をぐきく結帶をあるく寢るこの。太夫と天神のこと。きい淺黃ちりうんちんあり。その餘伯人といつてども房中帶あり。賤妓を丸裸ゐしを卧を。是衣服をいとふあるをり。いと奥さめておぢふ。

百九下 伯人の評

嶋の内の伯人を。太夫やどふをわるねど頗美あり。衣服をを紀やちぐみあどあり。繻半を着ど。帶ハ妓も歌妓も黑天鵞絨が多し。大ろこ京の祇園ろ似ろ。

○嶋の内の伯人。道頓堀の茶屋あどふ來りて客と卧し。翌朝ゆろふを。必むりひの駕來ろこの駕ふのりてゆる。是を朝開ゐい寢起のまゝゆる淺を人よろせどとを。いづもなるふのるころふ。或を私窠ゐ忘公をもどからもいろり。その道僅三四町の間を。妓の駕ふのるゝゆること又めづらし。京までもかるころあり。

○道頓堀の茶屋ゐも高卑あるく。大樓ハい嶋の内の妓もよび。小樓ハを坂町の妓をよぶあり。但し小樓ハを島の内の妓を呼まぬころふゐいあらぬど大ろこいかゝをどし。是客の尊卑ふよる故ゐや。

百十 俳優作術

大坂ゐていい役者もげゐ子ゐあまを抱ゐ紀。こまを他の茶屋に預けゐ紀。その花を得こ活計とするもの多し。兵太郎ゐどいふ役者を。ここのころふ妓をかくゐ紀。坂町へ出しゐくあり。ゐまるこのを兵太郎が抱の冨野と名ざしてやるこを。是芝居と妓樓と軒をあらべ居る故あるべし。

百十一 難波新地

難波新地を。左右六筋の街悉妓樓をり。數百軒ゐるべし。夜

名つけ行燈を軒に出し。甚さびしきなり。大かた京の二條新地に似たり。いづれも賤妓なり。

(百十二) 難波堀江 附堀江さし紙

難波ほり江の妓樓は。坂町に似て新地はなほおとれり。坂町はまれにせ付あり さし紙は。いづれも京の祇園のごとし。但圏點山がらはなし

堀江さし紙

今もし振出 新造後帯 二ぎ 一ぎ よし新 連	古きさまなり 新造前帯 釦座 壱本附 河 とめ

せんこう一本を六分と定め、四本にて花一ツ即ち四分なり、これを一座といふ、四ツとなり、或とよりと、花のさだめあり、彩色ある妓をさだめの外せんこう一本半よけいあるひをます事あり、由なに一本附といふ、又時妓は一座切の客へは出ぞ、ゆなに二座としさるなり、などのよ新河などあるせしいふ世なり、下は妓の名なり、新造とは年少にてらず、さじめてその地にいづるをいふ新造といふ

○新町は一かう引。揚屋をかりて一挺壱匁なり。その餘は二かう引なり。大かた京におなじ。

○嶋の内。曾根崎。難波堀江。難波新地。坂町。せうまん。尼寺。等なのく高下あれど。いづれも大かたおなじ。但し新町の外はみな私窠なり。

(百十三) 大坂妓院の方言

妓の言語は。京も大坂も大同小異なり。大坂は言語せはしく京よりきつしとおもはるる方なり。なといふことば。いかうといふことを京などへはつかはず。「来なさんせ」をおでなされ。「きなさんせ」をちやり。「客のかへる時に。妓よりわるしあさましれた。などいへば京とは異なり。又江戸にて「武左といふを。大坂にてはまさといふ。「廓の牽頭を判官といふ。略してぶらんといふもあり。「から場所の牽頭を。

弁慶といふ「女のかたより情をよせて男をひくを。おきゃんと
いふ「きゃんを。ろくでもといふ「あないちんを。あなちといふ「人の妻
を。ごりょんといふ。その外いくらもあるべし。大かた京に似たる言語
なるべし。

百十四 女子の評

京も大坂も女は丸顔多し。京を痩たちなく。大坂は少し骨
ぶとなり。顔色の美悪はいづれも京にまされり。

百十五 堀江の藝子

あり江は元げい子のよき所なりといふ。今はあしくなれり。三絃箱の
かゝちその外大かた京のごとし。但大坂はそれぞれの三絃
箱もあり。堀江のげい子。三絃箱のうちに歌本を入れておいてひかれば
あまりきくあるいはとは激つせるひとや三線のはそれてわるしろ

百十六 妓楼混雑劇（コンザツゲキ）

大坂にては芝居と妓楼と打混じたる所を。道頓堀と。難波堀江
と。北の新地なり。この内道頓堀尤もさかんなり。

百十七 浪速のはやりうた

大坂にて歌妓など。もつぱらうたふうたをめりやすといふ。京よ
りもおもしろしといへど大坂に及ばず。節は江戸の河東に琴歌を
まじへたるやうなるもありて。頗手にいらず節甚だやはらか
なり。秋雨 秋雨のそらしもしほれくるまでしれぬまゝうきねのことのは萩の花をくらべつれのからころも、つまにふれての一ふしあはれもおもひそへ後いりふしてきらふ
あはれの大かたこれてふまかく。章を推すり。折し新めりやすのひろ
めあり。尾州三州まではまゝを大坂よりして移る。又三十一めじの歌
にうたをうたひてうたふもいりきべく一篇なしぎることのをまたうる
といふ。又別にさまざまなるあり是は曲も加になり。あるまども江戸

のさわきまゝに似たり。

百十七 幇間（タイコモチ） 京もおなじく浮を

京も大坂も幇間を一席をもとに堪ざるものなり。幇間は羽織を着ず。嶋の内の幇間に音八といふものあり。これは狂文發句などよくしてしるなり。又新町に赤助といふ幇間あり。画をよくす。その外は無藝大食。甚だいやなるものなり。（京の幇間は四条河原などに烟をもちて客を引くなり。かくせざればくらしかたし。とのみに幇間のものなき男げいしやといふものあり。祇園はべしく幇間の内ちかきものなる幇間あり。）

百十八 首信（くびのぶ）が傳

大坂嶋の内に信（のぶ）といふ藝子あり。人渾名（アダナ）して首のぶといふ。いふこゝろは、顔色絶麗。その首艶美（えんび）なるを以てなり。今婦人の品定に首がよい首がわるいといふ。その首がよりきまりとぞ。行

年四拾餘歳。（大坂南柳の浮におのぶ宝暦十一巳年まうけれ、今享和二壬戌になりて、四十二歳なりといふ。）志てのまゝどる猶二十五六歳にみえ、實に人妖なり。それ朝開（あさけ）に紅粉をほどこさゞる顔色却て美なり。父は御所櫻長兵衛といひし角力とりなりしが、後角力年寄になりたり。のぶ安永のすゑ、げいことなりて京祇園にあり。全盛類（るい）なし。豪富の人これが為に金銭を投うつこと夥し。こゝに豪富三井氏すでにのぶに熱惑（けいきう）して、數万金を費せり。（世にはのぶに十万両の金を費せしといふ。）こゝに於て三井の親戚及主管（ばんとう）等大に驚き、忽主人を伊勢松坂の店に蟄居せしめ、年中の雑費僅百金を限りて、其主をも合力し、親戚悉義絶せり。この時のぶは京にとゞまるべからし。を自わりつらく寫日を樂を共にし。その窮まるにまちして離別せんは義にあらずと。強て松坂に至り、情郎に給仕すること十三年なり。のぶよくつかへ且まつ

坂よりの間。本居の弟子ども。そり〳〵源氏ものがたり。機織ること學び得たり。或日主管等商議して。密ふのぶかつら。そこ〳〵實情十三年の苦勞。餘の婦人の及ぶ所ならば。志かもとも其許のこゝふならん限り。諸親の憤り解ケぞ。主人ふたゝび世をひろくもることなりもぞ。志ともど主人いとの深情よひろも。龍ねとろつるは日なくもび。ごづから放ちやるこゝのこゝび。のゝ主君をねもふ実情あらば。ごづから〳〵請ふて京にゆもとつふ。のぶ主君の爲よ敢て爭ハぞ。遂ふ京よゆらんこゝを請ふ。諸親容りよろこび。種々の手道具等をなこゝ。路費を用意〳〵京よかつら〳〵む。のぶ京よゆりて手道具を賣り拂ひ。七十餘金を以〳〵御并等をこゝの〳〵別よ衣服を製〳〵。ふたゝび。祇園ふ出〳〵歌妓をあもふ。全盛むら〳〵ふすきもり。

そのゝち俳優嵐雛助。後嵐小六と改むいたりて死ぬ。雛助が父なり、容ふのぶふ通じて情好尤厚し。世上評判只〳〵この一事よりこゝふ角力より五七輩御呼櫻が弟子なり商議〳〵。御呼櫻が家よ到りくりつらく。ほのゝふきく師の女雛助が妾となもろと。師いなもび女を俳優の妾とふし。利欲の爲よ身をけがさしめぬぞ。も〳〵如此ならば吾儕師弟の約をかつもべ〳〵とのふ。御所櫻ものもを大よ迷惑し。このゝものぶよかゝりく離別せもこゝふ。のぶ又これを雛助よ告ぐ。雛助云。角力と俳優と尊卑何程ちがれる。渠こゝ〳〵ら浪人をたつゝりのこゝ〳〵ぐも。元祖をとりて人のこゝものこゝなるふいゝりてい共よおもすぐ。又俳優もむら〳〵い禁裏りめされ。公儀の上覽をへゝるこゝもあもび。由緒を論ぜるふいたりて更よ高下ふし。吾も又身ふりつゝものぶをうつきぐこゝふこゝ。こゝよ於て

争論止ぞ。のぶわりなくらし。究竟家父角力中にあらばこそ。かく
るよわりしぬてハ出来ぬ。殊に父年老たり。隠居せしそれんに
とて。京に上りのるべきならぬとめ。ゆたかに老を養ひしむ。爰
にありて御所櫻角力を辭して隠居す。ようやくならひを終に辭
ぬ。その後雛助病死して。のぶ寡(ヤモメ)となりたり。歌妓をなさしく元
のごとし。程經て俳優文七(男吉)にわりなきとて遂に文七が妻となる。
いく程なく文七病にかゝりて危く治療ならしなし。のぶ夫の為に
立願して。みづから髪をきりて讃岐國金毘羅に參詣す。のぶ
いまだ帰らざるに文七家に病死す。（その頃浪花人の談にあるは千金をつむとも首にあらずしてありきとし産を破らざりしハ必爺を落せ）
是より後のぶ又ふたゝび嫁せず。大坂島の内に出て歌
妓となる。今に全盛なり。のぶ去年とし和哥をよむ。又俳諧の連
哥を嗜めり。予大坂に遊びし日。一夕道頓堀の竹亭にてのぶと

會す。のぶ來りて席に着と。そのまゝ予が名を呼て言語旧知の
如し。餘の哥妓幇間等先に来るものも。いまだ予をしらざ
るもあり。のぶ問をぞしてはやくその名を知るをあやしむ
べし。席上の嫖客のぶに發句をもとむ。のぶ再三辞して後

こゝろをまして紙をひさし帰やきかくには　　のぶ

かくしるして出しぬ。手跡も又拙からず。のぶ予に扇面を請
ふこといと深切なり。則狂文一篇と狂歌一首をしるしてとらせ
ぬ。諸客興に入て。席中の哥妓幇間みな即興の發句を作る。
又予に文をこひ歌を請ふ。そのあまりし。四更にしてはじめてやむ。

もしやその枝しやかゝもりし花　　哥妓　ふさ

ゆめならぬ手にとる千きりの秋　　同　志け

一ふしに虫の音しみんとふけにける　　幇間　音八

この外席上の嫖客。雨窓。國瑞。盧橘等即興の發句あり略す。

百九 吾雀が噂 附幇間亦助が噂

大坂新町なかのちん町の茶屋。松雄屋伊右エ門い。吾雀と呉し俳諧をこゝせり。手迹も又拙からず。元トい医家の子にて後よ幇間をかしけるぶ。近ごろなりのでゝ茶屋をこゝりぬ。茶やい揚屋ふつゞものあり、吾雀妓院中の人よ似ず。至極見識あるものあり。予一夕盧橘よいざゝるれく吾雀を訪ふ。主人大よろこびく書家の欲をかも。予ふ歌をこひくもべ。

なかのこゝろあり法雀よ者のしてねまけかるゝ川水

又同呼よ亦助といふ幸頭あり。元ドを加賀の人ありまし。この亦助面をこゝもそ。吾雀よびむこゝ予よ謁せしめ。席画をかさしむ。亦助席上よ筆をとる筆意あゞ妙あり。予ふ賛をこゝ。吾雀ふ又こゝもふ賛もこの亦助至極柔和ふして。幇間のごゝなりしゞ。

こゝゝら足齋衛之と號もこ。但文事ふなる紀人とこゝ。亦助こゝゝら新町橋のこゝふ俠者(ヲトコダテ)のたゞもゞ居るかゝを画く。予ふ讃をこひくもべ。

ちよとこゝく揚結まゞいむくたなもこゝ出入の秋の月紀
芋の画よ　煮しめていちやこゝ玉や皿の芋　吾雀
なゝ美の画よ　おもくれくあゝもれ俳もゝ水こゝふ
ゝ氏の画よ　仕のゝまるかしい沼ゝ地ふ　仝
大坂の妓院中。この者二人と。南の茶屋と。音八の。少しく風流
なりくこゝゝ京ゝもかる徒よ風流あるゝ紙をこゝぶりし。

百十 總嫁

總嫁ふ。今道村の田のこゝよ出るりのい。紅粉をかゞこゝさゞ。さ

ゐぐら素人のごとくそゆ。ゐづれも醜婦ゐり。まろもどる病疲の者ゐをこのらぞ。又西横堀の材木のうげゐ出るものゐいづれもよそゐひ〳〵美ゐるものゐり。〳〵〳〵六三ゞらびまて不。うれ材木のゐる不なりとゐる夜夜行のうりふ。友人指さして かまもり。

大坂の遊廓小屋ゐ大きさ江戸のごと

百廿一　とび江やらふ

大坂まく〳〵舟まんだらを伽やらふとゐふ。土地の俗とぴん志よとよび ゐせり。毎夜船を前ざまに嶋。その外元船のかゝを居るゐのうりふ あぎゐり江。伽やらふとよぶゐり。則元船へよび入まて船頭の あそびゐのとなりとぞ。とぎやらふとも。閨の伽をやらべしと いふの義なり。元船の舟人ゐまをよび入まてくゐる時。ゐれぴん志よ立膝をし。前をゐ〳〵ふして客ゐゐせむ。是その陰中

瘡毒ゐ江をゐめをれ意ゐりといふ。予これを聞く暫時噴飯せ。

百廿二　妾奉公人引札の噂

大坂ゐ〳〵先年。めりけまを公人の引札をせ〳〵めれゐりと呼〳〵故。 ゐまを大坂の人ゐたづぬるゐ。それ伽官より御志ゐるを請て。 それをとやゝぬ。ゐづれれゐまをび。今をその引札をゐちゐるゐの ゐゐ〳〵ゐり。ゐゐうれりのを後ゐうをび。何とゐうゐれを のゐり。

百廿三　京大坂商家の評

京も大坂も。妓楼の夜具を甚麁末ゐり。太夫天神伯人といく ども。郡内縞の蒲團一ツふ過ぎざる。是夜具をゐふその茶屋より 出を故ゐり。伊勢古市辺まるかめの如し大坂を京やど遊歴の旅客ゐ。ゐるを ども街頭悉妓楼まく。又悉繁昌せ。大坂を一體金銀ゐづうよ江

地あり。商家の小厮（こもの）といひぬ。自分のまたらぬを以て商ひの利を得ることあり。畳を業用よりだんだんとく寸暇あるものあり。おい五ッより後。商家の主従ともに徒然あり。まあ一日は辛勞を忘れんためふ。妓楼ふ至りて酒をうり遊べり。商家の奉公人も。自分一個の商ひすくに得たる所の金銭を費し。敢て主人の財をうばめるふあらざれども。主人も強くこれをいましめず。まあふ妓楼おのづから繁昌あり。京を去ること遠ふ。呉服物など商ふ人ことごとく女なり。これを牙婆（スワイ）といふ。この牙婆反物をせおひて旅館に来り商ひをなす。女子を反物をとり扱ふ。手先和らかふして反物損ぜざるとあり。言語おだやかふして。價を論ずるふ至りても一個の才覺あり。萬事主人の意をうけ。これをうる為。却て客の買ふべからざるものをも賣ることあり。又金銀をとり扱ふよりんを私をなす。男子を出商ひをするその必ず私多し。是を十字街頭悉妓楼あるゆえなり。こゝをもて出商ひをするものは悉く女子なり。京と大坂の商家。こゝろを用ゆる才覺。大小なるかとかくの如し

百四 道頓堀（どうとんぼり）の芝居

大坂の洪水後あり。芝居いまだもどまず。道頓堀の大芝居を間口京の芝居よりもひろし。その中芝居あり。大芝居のごとくのあり。あやつりと中芝居は興行せず。八月初旬ふいとりく。道頓堀角の芝居ふ看板あぐる。浅尾為十郎。藤川八蔵。大谷友右エ門。中山一德。友吉あどゝゝゝ。八月十五日ころ初日なるべし。

○道頓堀の芝居あてい。江戸あく川ゝと称するものゝ茶や

の下女あり。見物の人とうれい走りうりて。コレ一幕えさんせんとつゝく袖をひく。

○もべ〳〵上方の芝居を。幕の間の太鼓ハ半鐘をまぜくうり。口上のひを幕際ちう三尺ばかり外。花道へ出て役割をよミ上ル。むもの〳〵ゆゑ。口上をうりても幕ハあぞらく明ケば。こ紙る大ハ拍子ぬけ紙したるものなり。

○大坂をとほく桟敷の高料をる呼ハく。たゞ芝居ハ至りて増しとつゝとなり。たとへば二貫二百文の桟敷へ。四貫文の増をとけく。都合六貫二百文とる。京も増しあるとゞも大坂程ハ。なく。その餘を京も大坂もかゝるまゝなれ。妓と雜劇と食物ハ。江戸尤下直なり。

○大坂の中芝居の役者ハ限りて。返詞をするハイ〳〵とつゝふ

あるハ素人ゆゑハイ〳〵と返詞をするものを。小芝居出とハ〳〵笑ふなり。

○遊女の短尺もべ〳〵の書物ハ。紋所の印をあるゝと尊子八千代もゝめ〳〵これをなせ〳〵ゆゑ。箕山ゞ大鏡ゆ見ゆ。

百廿五 伏見の夜泊

八月五日七ッ時ちう大坂を出ル。船ゆ〳〵伏見へ登る。今日浪花の友人盧橘、國瑞、薺坊さ〳〵山和尚、雨窓、蜀人、大野木等、送行の盃をのゝ。今夜風雨淀あ〳〵

あるゝ。

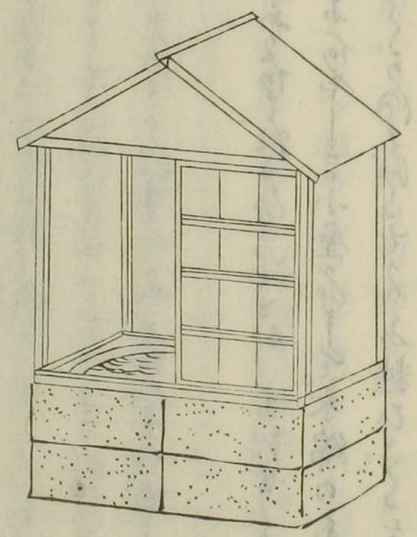
六日船ハ伏見ゆ着ぬ。今朝ゆ〳〵大風雨。六月の洪水ゆ〳〵て大津へ出ル。直ゆ京ゆ〳〵晴をまつ。八日ゆ京を立て水口ゆ泊る。今日大津邊所々洪水の跡をゆく駭然なり。

○八月六日の大風雨ゟ伏見より大坂の間又々出水。近日築直せ
し堤をおし流し。八軒屋邊六月廿九日の水より〻水高きこと一
倍もとゝ。この日大阪の小橋三ヶ所かり架たり。より〻五六日大坂へ舟往來なし。予も幸
ふ五日ふ大坂をたちけるゟ路次の愁なし。此節石藥師庄野の
間すべて大水。もっぱら落ち五七日往來あし。予ら開より伊勢街
道を發ち。九日の夜津ふ泊る。津ゟ兵丹屋とゝふ旅宿あり。參宮
の旅人津ふとゞまるものいかゝ〻ぞこれ兵丹屋ゟ來るゆゑふ
甚ぞ繁昌せり。

(百廿六) 伊勢路の居風爐 是より伊勢及び紀州の話を載せ

伊勢路の居風爐を大〻と戸棚あり。その形ち圖のごとし。上を
ちふぐさふ〻して箱の如きもあり。

しきふろのうちふ
柄のごとき紀ひ
ちゝ〻あり、こゝを
ふく〻かゝへ中を
かけ〻まわり、尾
州三州あたりの
人いこゝを嫌ふ、
是死人の入棺ふ
似るゆへの俗忌
なり



下を石ふく
たゝみあげ、
湯のあさ〻
しを一尺ふ
ほどぞ

りの〻かゝちあり〻てかゝるあり〻りの戸棚のせの居風爐

(百廿七) 山田の客舍 附間の山

十日ふ山田妙見町小倉屋甚右衛門てふ旅店ゟ宿る。この地の
友人佳木通称山原七左エ門來りて深切ふ〻りてあさる。久老ぬ〻を訪
ふ。信州遊歴の留守すてあるべ。月仙老人ハ訪ふべ〻りしが。

追書
たけの郡い
神祭のまふ
あらびこれ
いのあご考へ
たゝまをて
あやまりて
あり

これも因幡のいそぐるまゝ二えくぼ〜てやゝぬ。されど人みと
づけく画のまたのとつまをせう。

櫛田川ふく

さゝをゆく櫛田の川瀬一面あよかをたせ〜ゆかゝは郡路

○十一日参宮　まけ入るやたけの郡の市は暮

めうこの(ゆ)せたまゝ〜ふる神地よ冨美ゝまもまゝかのと

○帰路のはをぐるまゝに。二見ゆきまゝ(ゆ)ばゝてやゝぬ。

京第はふゝえのうゝにゆまをるゆつまの家をゆゝ〜ゝる

○間の山ゝく

うたひめのまゝりゆまをれるひゝいもかゝまゝ紀せゝよあひの山本

間の山の片うげふたのやゝき小屋ゞけゝを。木綿のふり袖こりやう

ゆるゝもちあゞとゝく。ゆまげるむゝりふ粧ひゝる乞女三絃を鳴

らゝ〜銭をそふされどその三絃の曲節もいゝきはゞゝきりよふく。

今江戸の芝居ゝくもる相の山の章歌ゝく似ゞ。老婆ハ小屋の

前ゝく草履を作りゝくわを賣る。参宮ゝく雪踏をゆゝさゞ、ゆふ旅人

又七八歳の兒女ハ。さゝらをゝきりゝ沙をゝりゝむ。一尺ゞそりの木ゝまぎ

てゝる。左右のゝを前ゝ出し。首をふり腰をゝゞめハアゝといふゝさゝらを

なゝらゝ、舞ふゝあらゞ、かゞゝふあらゞ、いゝふゝゝあるゝまゝあり、その外の

乞女ハ。手ふ笛(ザル)をもちゝく世界の旅人ゝつゝ。日ゝ活計をゝゝ者

多ゝ。その四の乞児本絵の神ゝ〜ゝ狂歌を表紙をもりゝくゝゝゝゝの、殿中ゝやゝり

ひゞゝやゝとゝゝくゝゝゝ殿中ハ神ゝ〜ゝ狂歌のゝとゝり兄古語ゝゝ或人ゝつゝ

百廿八　古市の總評

古市ゝいづゝも大樓ゝり。ゝせハ暖簾二重よかけゝく。ゝり。ゝゝ

つねのゝゝゝんの如ゝ奥行一間の土間ゝゝく。そのゝゝり口ふ又

長暖簾をゝけゝ。ゝせの隅ふちひゝ紀曲(ド)突よかゝら家ゝは一ゝ

ゝけゝく。ゝり。是ゝ茶店の名目ゝれバかゝり。

○古市ふ〳〵容あるべし。家内のかやま残らず出く仕事よりあらぶ。大〳〵十五六人廿人ばかりあり叔盃出く酒のりまれば。衆妓酒の相手ふるり。一人毎ふ客ふ盃をさしたその内二人三絃を鳴らし衆妓同音ふうたふその内まく客の目ふとゆりし妓を定むもべ。その妓つとおもく客の傍ふ居る。衆妓を猶席ふなりく身を添ふ。このうち追〳〵客あるべ妓五六人ばかりまくその客とのりてあるを。閨房ふ入るの時ふのりて衆妓まし〳〵ぬく散ぜ。そまるでいほしふまし〳〵ふ貪り食ふ〳〵あるべふあり。

○古市もいまい伊勢おんど大ふおもしろく。大坂ふ武ハ江戸のめりやす潮来ぶし似く非ふるものをうたふ佳木てふおもふ声〳〵ふおんどをうたひ皮せうり。妓ハかつ〳〵うれふおるべ。妓もいせのようだの一下おどまとふ〳〵をうたひてどかんどあハ江戸ぶ

音頭のこぶ長〳〵の地ふたのらまたし〳〵れ。その外のおいたし〳〵ごのおし〳〵ぶおもてる。

○妓を京大坂より野鄙ふり。髪を髵も髷も髱もぶり。四方九し。圖を前ふ嶋田の髷のうしろと髱と引付〳〵あり。前髪を京風の如くきり〳〵前へ出てる。衣服を絞り縮緬の單物。或ら紹縮の帷子。帶ハ蒲縮子ぬづと縮子等あり。中々祇園嶋の内ふど及ばず。縄手坂町の妓ふ對をべし。

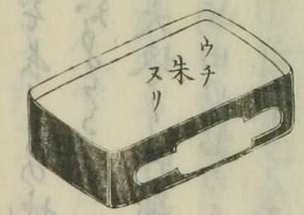
○言語を京談ふ似ていせ訛りあり。

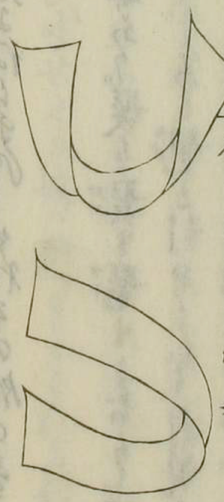
「やけるといふを。せ侍ふ」ふ〳〵るふあんし。「おさわといふを。ちやちやりつ〳〵ふ〳〵ぶんを「おたハ」ふぐ〳〵ふぐんせといふづまを。せの字を言中ふふ〳〵をいふんし。「おたくしをたくしぶんを。ゆ点。ぐんとふぐでし。ぶぐ〳〵京大坂いせの女子ハ茶を必ぜ

茶々とろさねくいつゝ結ひとゝ。

○古市ふゝ地並とゝふを。一夕方金一顆あり。旅人を廿四匁。是金壹分貳朱ゝあるゝ、のせふまがゝとゝふりのあり。則紙札あり。壹匁札六十四枚を以て小判壹両ゝ換ふゆゑふ六十四匁ふゝ壹両あり。名古屋いらゝを米札とゝふ 夜食を床ふ入りゝ後夜半頃ふ出だせ。菓子を坐付ふ出せあり。地並ハ席上行燈ふゝ燭臺ふゝ、その外の食物等萬事畧せり

○古市。松坂。四日市。桑名まで妓楼の硯ぶとゝづもも圖の如し。飯鉢の臺の長きが如し





「硯ふゝの下ふを必ず杉のへギをしゝ也

○初會の客も後朝ふを子髪蒔繪の匁箱をのち來り客ふ呈せ。文をのり入ふ櫻あどいろぎりふあるゝたてふゝあり。京大坂とも妓の文を尋常の半切ありふ。伊勢ぞあり古風のゝりて竪文あるもをゝ。扨客逗留せれば。子髪始終付をひ居て必楼上ふいぎあふ。ゝゆゝぎもび妓ゝづゝら迎ひふ來る。その手段いとゆめやうあり。

○伊勢の妓楼あるゝべきゝ。第一古市。第二松坂。第三身田（イレンデン）第四四日市。第五津。第六神戸。第七桑名あり。この内桑名ハ少しわゝれり。桑名の美濃屋とゝふ楼少ゝ趣あり。凡此七ヶ所の妓つゝり交代せ。年中その月よりゝその地ふ盛衰あり。故ふ時々交代ゝゝ久ゝ一所ふ居ぞ。吉田をゝ崎又此内ニあり より ゝ此七ヶ所の妓その趣ゝなお似ゝり。

百廿九 古市芝居の噂 附 一身田及堤世古の噂

古市に芝居二軒あり。春と秋興行せり。近年春一度興行せしといふ。一身田も至極繁昌なる地なれども芝居あり。八月初旬大坂より片岡仁左エ門などくだりて芝居ありといへり。

○古市の外山田に賤妓あり。夜をこめ行燈をともし甚だおほくあり

○山田にては横町を世古（セコ）といふ。今も大世古堤世古などいふ名目あり。

○津より山田まで九里の間。食物悉く蔬菜あり。宮川の西なる堤世古の松坂屋三右エ門といふ酒店の料理よろしくよし。申名に店上客たゆるてなし。松坂より宮出の途宮川からある店多し明星のところてん夏月ハ湯製のもの此ら古湯製とてなく珍重せり

追書 かの書、後に古筆鑑定に佐川田昌俊にかゝれ、龍安寺偏易和尚黙々お

百三十 大平が噂

八月十二日松坂の大平を訪ふ。通称布屋これは大平を元豆腐屋なりしが。國學にこゝろをよせ。宣長翁の弟子となりてその志厚かりしかバ。宣長養子としたり。宣長の跡をつぐ。此大平のとしは四十あまりにて。至極人品よき人なり

大平 さやけき此一夜よ千秋の秋の月ひとよふ千秋の影やうつれる

大平 女郎花さく野ふまけぬほど直なる人の袖もぬれなん

このふたくさをかきておくられる。みのおほよそしるせり

百卅一 坂和田喜六が墨跡

松坂の長井元申は医師にて書をよくせり。名を習字申之。一申と跡をとなかく申好きの人なりそ。多く古書画を愛せり。所蔵に坂和田喜六が唐紙一枚にあり

もとあり京の大倉好齋の鑒定ゆも、江戸の古筆隱居子意ゆも、ゑせ〜ゆ皆右の如くよ云りと、桂窓の話あり此書松坂人長井嘉左エ門の珍藏あるゞ右の鑒定あて珍藏の瓶よあり〜とゆ又これ同人のまゆ〜あり、

たる三行ゆ也けり。

歲 正 相 尼 仰 字 寂 西 相カ 撰

月 明 ゆ 東 道

メクラス 又 為 我 塔 業 住 處

隷字 黙 二 翁

嘯月 印コノ大サ

野 下ヲシ

手迹を大師様の如〜〜ゆ。黙々翁を喜六ゞ表歸あり

百卅二 道のへ也槿

追書
當時ハ平いまだ殿村主人と面識あらざる〜折之

松坂の殿村三五平を。蕉門の杉風ゆ後あり。とゆふ。ゆ也紙墨迹多〜。ゆ也内ゆ

たのへ也槿を。るゆふ。ゆ也紙

件のうけものあり。諸集を道端と。道のへを先按あて後よ道端と一直せ〜ゆ也ゆ

又同人所藏のうけ物ゆ。許六ゞ俳諧三聖の圖ゆ也紙の贊あり。三聖ハ宗祇宗鑑守武 前書長文ゆてあり。以上長井元申話 予歸路をいとゞ〜ゆ一見せゞ〜ゆやゝゆ。

追考。後ゆ也〜ゆ殿村氏を杉風ゞ子孫よあらゞ。二三代已前の主人俳諧を好〜〜ゆ。ゆ也紙以下の墨跡を藏弆ゆ也ゆ。ゞ。今をあらゞゞとゞ。かゝゞゞ傳聞のあやまり知ゆゞ〜

百卅三 其角ゞ自画賛の評

長井元申所藏其角が自画賛なり。唐紙横ものの

かゝのこ〳〵。發句を画へうけ〳〵書付たり。其角の名い薯子とのひ〳〵あり。按ずるに薯ちのもなり。其角画を下手なれば。そがゝら芋と卑下せ〳〵あるべし。今も下手をいもとふことあり。元禄以前の洒落なるべし。

(百卅四) 伊勢の好事家 附人物の評

勢州追分内日泉(ヒナガ)村ふ。岩清水亀六といふ人あり。こゝに謝肇淛が唐紙一枚ゑ書〳〵三行ゑ書あるよし聞ゆるべ。帰路ゑ亀六を訪ふふ留守ゆゑ〳〵ゑえず。亀六も頗好事なり。

○四日市ゑ伊達源三郎といふ人あり。五拾の好事家なり。そは弟馬曹も詩作俳諧など嗜めり。八月三日両子を訪ふふ馬曹い當春没し。伊達を訪ふふ〳〵なのもなし。

○津も伊豫町八幡邊ゑ訪ふべき人あるよしなれ〳〵が。帰途の急ぐ〳〵まゝふ訪ふべし。凡遊歴の客の道をいそぐい。趾を以て箱を洗ふ如く。空〳〵く手足を費し〳〵詮ふ記しそなわるべし。

○三州吉田の濱名屋勘七ハみづから扇亭と號す。所藏の扇面數千本あり。これを一覽するに一日にしてみな盡さず。

○伊勢にて人物は。本居宣長。韓天壽。田必器。月仙。久老あり。此内久老はその名いまだ發せず。宣長は伊勢のみに限らず實に大家なり。宣長當春物故す しかれどもみな古人となりぬ今熱するもの月仙と久老のみ

百卅五 筆捨山

去る八日に大津より乗船して矢走に着きぬ。しかれどもむかしく船底に潜み居て。湖水を賞するによしなし。九日の朝鈴鹿山を過て坂の下に出る。山中に狩野古法眼が筆捨山といふあり。山は高からず石山にて小松生しげれり。武州金澤にも狩野の筆捨松といふあり。又紀州にも同名の松あり。いにしへは畫家もいと拙

かりしにや。うつしかねたる山もなくおぼえめし。後人山水の名をまうけること これらハ却て雅ならざる者

まそられく山もふく乱ふそふし

百卅六 桑名の秋雨

八月十三日津をたちて。未明に上野へ過る

狂句 秋の雲居を上からのしけ

今夕桑名に泊る。ますや 丹羽吉九右衛門 長成 米屋佐介 などといふ人いと深切にしてあつかへる。十四日雨ふりて船出ざりければ逗留。遊歴中古書をたづねるに珍らしきものいたづらなりしいせにてはの山形屋といふ書肆に元禄已前の草紙類にめづらしきもしれのありしかもめづらしのの地にあること二日も逗留せば珍書も得べきをならひ一日にして出立しければ今さらしくおぼつかなきに及ばず遺恨甚し。伊勢路は松坂津山田邊廿年來の豊作といふ。但川付の田地は少しく水損あれども是は僅なり。八月六日の風雨に早稲を倒しぬ。これも愁ふべきほどにあらずといふ。只

神戸領。桑名領。町家川邊大水。田地悉變して河原となるもの。

百卅七 桑名の歌曲

桑名邊あゝ大坂のめりやすをうたふ。あのもどる風調少しく異なり。又さゝものといふものあり。おもい歌淨瑠理なり。此さゝものよ。あを嵐。田ふゝ。などゝふ章歌あり。

百卅八 桑名市中の喪

桑名まを喪ある家まを。軒まむしろをかける。江戸まて簾をうけるおゝ。大店を莚二枚。小店を一枚なり。則暖簾をさげたる如くなを。土人の云。こゝの

天武天皇行幸の時の遺風なりと。

百卅九 一目連

桑名より三里ばかり西北ふ多度といふ所あり。多度大神宮たゝせたまふ。相殿ふ一目連といふ神おはゝまし。宮殿ふ扉なゝ

一目連ハ天目一箇命又天麻比止都命天津比古称の御子あり

翠簾のゝなり。神体を太刀一ふりと幣のゝなりとのふ。この神甚奇瑞をいのらもゝ。折々遊行ありふとなりとて。里人專ら信心をを。多度大神宮ハ桑名より乾の方三里許まあり、祭る神を天津比古称命あり

百卅 佐屋廻り

十五日も雨ふゝ宮へ舟出ぞ。せびたゝく小舟ふ棹さゝせく佐屋へ廻る。

弱ものゝ朝をたつ面影宿　五寸
佳秀ものゝ夕をたつ面影　工十
稼ふ鉦の志ゝる秋空　五寸
暮ゝまゆぐ鉦のほゝせよ秋の面　工十
扶やまをせてくる弁の春　五寸

桑名の俳諧師ハ加ゝ美濃風と称を。志ゝまでゝも文考ゲ

風調よもかぐまで。田舎の俳諧を頑ふく佛者の他宗をまぐへざる如し。この日架橋とつふ人。船まく佐屋まぐ送まり。船中の吟。

さそもは枝もひのしに朦やうの月　架橋

やうそうりうけまとの系乃露　乃舞

○佐屋本陣呼望の短冊

宮ぬきれのやとそつの名もさやへまきたのふ名ひなし

（百四十一）名古屋の十五夜

十五夜名古屋に霧雨ふりぬ。十六日名古屋に霧雨まて。

名月や蛍虫ふく　蛍　まつら

おやとるさしに百里を踏岳くひとりのまる芋の名月

（百四十二）藤川の夜行

八月十七日藤川より赤坂に出る。日ふまく兼末の虫のまつと

唐衣橘洲ハ小島源之助と称し醉竹菴と号を田安府の小十人あり

物のしるし。月の出る頃あるに空ちくのりて乃至すくらし。

かもくまきれ月も名ぬ出ぬ　ふくまく　鐸洲の鈴虫の聲

（百四十三）ほせ茂の蕎麦畑塚

藤川の駅西より入口南のうに。今年新ほせ茂の蕎麦畑塚を立う

あくもこの村ちき紀年ちきりまる　ほせ茂

東海道京まぐ行うち。驛の街頭ふほせ茂の発句塚ありぬ。

ほ興津のをまり。又杖つき坂ありあり

（百四十四）のらくろも

橋洲老人。七月十八日ふ月まのまくまま。名古屋まて吟ぬ

のらくろも名ぐうの月　拙の歌ちまくまだ

（百四十五）かもうの里

山城より伊勢遠江辺の冬瓜をうつちやるとあるは〇かくの如く
丸きもあるもどすねるなり。かまもち甚だ大なるなり。どうなるといふ
らの箱根より西まもなし。さる栗埔塞なり。味ひ尤淡薄なり
てくらひぐるしく。京もていうばらやもゆで。青のりをふりかけて
酒の口とりあるどんぶりもつよくくらあるべし。

百四十六　濱松の夜雨

八月十八日濱松ふ宿もとの夜雨いとくふりぬ。明日大井川越
んしとあるべつのあり。

ふり流をあるもあるをあるとの事　大井川あるりあやまるとと

百四十七　東海道の噂

東海道小田原までい。人氣家造り等悉く江戸をまねぶ。刺
なぞまねどうる店ハ江戸の如く障子ふたぞおの系を重ねり。

箱根を越く風俗少くかそれども猶江戸ふちうし。遠州路まで
ハ女の髪の風も江戸をまねび。言語も一風のうとつづも東
國訛りあり。今切の渡しを隔く三河路へ入もば大ふ一變もた
むもの看板あど京地の如く。〇たぞと〇かゆうの木札をさげ
おく。尾州ふいくうて又一變もた。宮七里の海上を隔く又復一変
もた。大坂より西ハいまぐうるべ。江戸より東北猶いうふらんう。
京より伊勢までの燧石ハその色大ふ黒し。水戸より出る石のごとく潔白
あるりのきくはあり。京の婦女江戸の燧石をえもば大ふあやしむ。

百四十八　薩陀山

八月廿日興津ふ宿もとき嶌よりもと行邊まで一里の松原
を過るふ。三保が崎を右ふるくゆくくゆくくゆ驛ふ入りぬ。

ふ結びのもとりあるもめつらし　沖津鯛

同廿一日未明ふ薩陀山を越るふ雨少くありて風景と損もやう

明るたりてゆ〜雲のきれる方をみれば富士の裾半ばのぼられ出るもうれし。彦のほとり夫婦とおぼし き順礼ぶも〜とこどとつひあるのら跡より来まり

拾弐の不二らきつた山の神まを婦宿場のあ〜いまり小木

百九十九　大井川

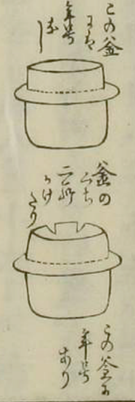
去ぬる十九日の夕ゝ大井川を越たり〜ふ十五日の雨ふ川ましば らくつの〜きの六十八日ま渡〜もでめゝるとつふ。この日も折々 雨ふりけまば水高〜流をけもも〜。川ご〜の乳のあらうまでひさ〜ぬ。過〜五月廿二日ま大井川を越たり〜日もかゝのこと〜。あらふ川ご〜ひとりに九十四文のそゝまりたり。連基てふもちょのりかつぐ まるぶ〜らゝゆるふ。めゝるめ紀〜いとゝろゝる〜かり幾 大井川れを地獄のきうひあも祢をなぐの蓮基〜らに

百五十　喜瀬川の大水

去ル十五日雨い〜〜ふり〜。次の朝五ッ半頃駿豆の堺ある喜瀬 川の橋ふぐまたり。この橋ハ過〜六月廿九日の大水まなぐも。七 月十八日ふもじめを仮橋のそゝり初せ〜ふ。八月十六日の朝 水俄ふ漲り出く〜の紙仮橋をか〜流〜。水も向ふの竹數をも らゝりと茶店の老翁りぶぐゝる。予ハ廿一日ま〜ふ来ぬるふ。 川幅ゝづゝ廿間ま足らぬ川を連臺ふ〜ま〜ぬ。かゝるあとくい ゝめづ〜〜きとあり。三嶋の東新町川の橋箱根三枚橋その 外ゝ紙同時ふ落〜五七日百姓ゝた〜ゝり。悉く連臺ご〜紙 り。十五日ま い予楽名ま〜〜ぶ。桑名名古屋の間川々を何の きゝゝりあ〜〜越ゝり。ゝづゝ四五十里を隔〜天地風雨の變 化かゝ紙ごゝ〜

百五十一 箱根東福寺の釜

八月廿二日もとね山を越ゆ。うばが日三嶋をなちて大磯ゆ至る。山路をかけ〳〵十二里の道なり。箱根權現へ詣んと道よりうけぬけたるゆ。社まぐハ程遠〳〵。供の人足りねくもんこの心うけまぐ。二の鳥居の左りがの方ゆ釜二ッあり。文永五年ゆ造る所ゆ〳〵東福寺浴室の釜あり。別當法橋位隆實とこのり。一ッの釜すい年



號ゆ〳〵。銘も釜のふちゆ鑄付たり。かの
もたゞ〳〵紀まくふうつ〳〵來らぐ。

百五十二 さゆが河原の懷舊

さゆの河原ゆ〳〵

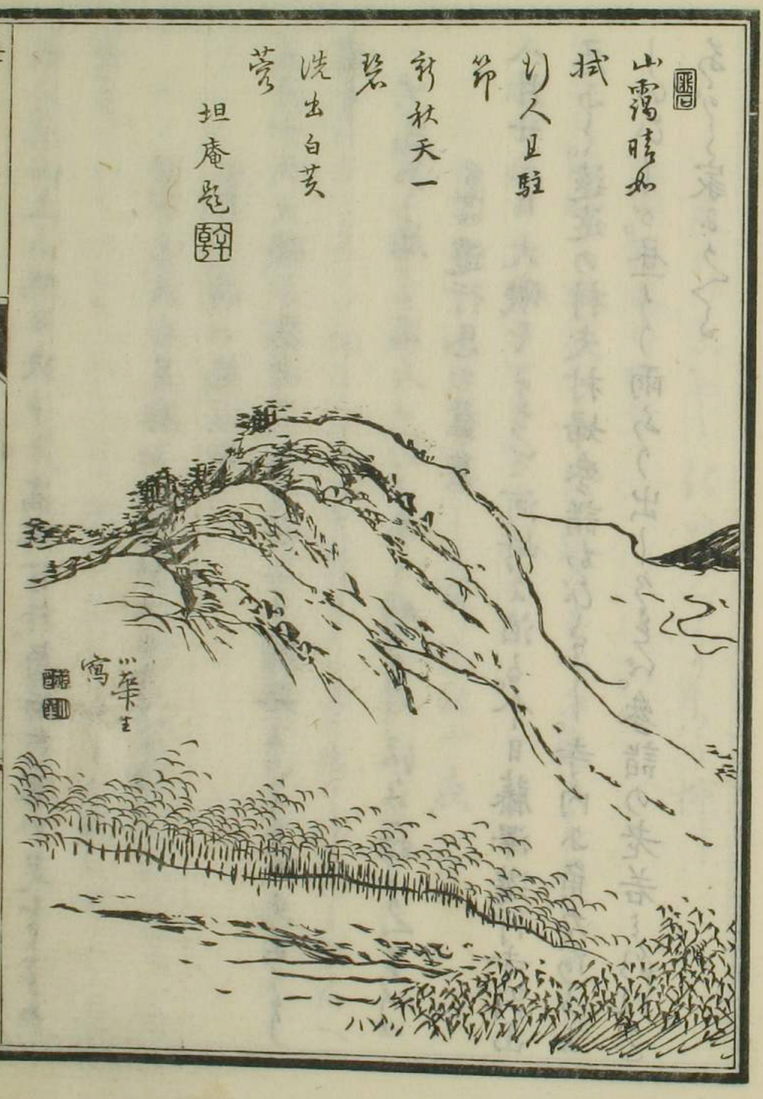
もこひやまもさゆの川ゆ郎のいもこ紀のさらふゆうみ

心のこゝりぬまものを。さゆの河原五體の地藏堂ゆり。ゆがゆ
ゆ〳〵ふもうがもむまめ。せいつゝ、又三歳ゆ〳〵世を早ふせられ
し兄吉次郎、荒之助、の事ゆど何こゝふ〳〵思ひ出らもく。ゆぐ〳〵
たゞぐこゆゆまゆ。ゆこゆゆき〳〵ものゆ來り〳〵。權現に案内申さんと
〳〵たゞくといこのゆ〳〵〳〵ふすぐ。錢五六文ゆげのうふまゆ。
むらゞすて ひろひゆ〳〵ゆゆ〳〵〳〵らびあもわふゆ〳〵〳〵〳〵

百五十三 平越の富士

五月西遊の日。連日雨天ゆ〳〵一日もこがが山をえぐ。八月歸路
ゆ到り〳〵。駿州岩渕より原より原がゆあひぐ。終ゆ全形の不二
を見ざるとうらこゝん。廿二日もこゝねを越るの朝一のゆゆがが
たひらよりさんがが河原すぐ三里ぐかりがが間不二を左りふ
〳〵登る。この日快晴。只山腰ゆ一帯の白雲のり〳〵重り如く

嶺姑峯一山
平越眺望之
不二山真景
八合目ばかりとつもり
かげくろ
あり
せよ
しん
不二の
風穴
あるべし


山霽晴如
拭
り人且駐
節
新秋天一
碧
洗出白芙
蓉
坦庵老人
華主
寫

あつめたり。山上に旭日決して高興言外。暫時行客の足をとゞめたり

百五十四 名馬の足跡 此条雨談に出たれバ省く

百五十五 大磯の戯咲歌

五月十日大磯に宿せり。八月廿二日帰路にいたりて又おなじ宿をとる

大磯や虎が雨ふる頃は来て晴るゝ川は秋のくもなり

百五十六 遊行忌の群集

八月廿三日大磯をたちて河崎に泊る。今日藤澤遊行寺開山忌なれバ。遠近の村夫村婦参詣おびたゞし。寺内に角力あるよしいひしが。昼より雨ふり出しけれバ。参詣の老若こぞりぬれまどひて家にかへる

翁ハ會田氏を娶とりて一男三女あり長女名をさき此時九才、次女りふ七才、男鎮五郎、後に名を興継宗伯と称す五歳、季女くわ三才、季女い即ち幹等が生母なり

遊びしふやと秋ゆかべよりもまた柳

百五十七 帰庵の祝章

廿三日川崎に旅寝するに。家路はまでに遠からねバ。さすがに秋の夜のあくるをまちわびけり

さらしはや江戸へ隣て秋一夜

かくまで廿四日。ちかく江戸に入りぬ。家居までにちかづけバ。四たりの子どもら袖にとりつき門まで出てよろこびあへり。凡百餘日の旅行。家内のものみな一日も病なし。予も亦旅中つゝがなくすこやかなりし

風も身のまゝむしけるあつく田舎より江戸へ入りの秋をあつめて起

右五月九日江戸を立て。八月廿四日江戸に帰る。日數百有五日遊歴の國。武藏。相摸。伊豆。駿河。遠江。三河。尾張。伊勢。近江。山城。河内。

攝津。都合十二ヶ國也

享和二壬戌年八月廿四日筆同十一月朝日校合畢

曲亭　瀧澤解戲記

附録

一旅まくあるくむべきものの

○貪りくはのくもとあらぬ舟人

○むらり旅とはくはけしきむ宿引

○名所を過る日は風雨

一旅ふくこころうべきもの

○銭をおしまでこうらの川をとるもの

川越の賃銭甚高き料といへども、はるかに商賈の業れとあるべしたゞ、商賈て藥代をつかのはい、安盃のごとくはるかに人欲の常あるとど常を分せしをおりつばまれもいかむべき、川越の賃は又うはどと、只命とはりぐのちん銭とおりひくべし、ちろぐろもとあれば三枚ぐ

まくまぶる十六文の銭を惜こてある武家の偽足怪忠者とうあひ
をこしまこねの山中の人うるまりうれ八月十八九日のの事なり

○川留ふ退屈しを容る留川を越ゆべうらぶ

○近ちをまかりて猥よ船ふ乗るべうらぶ

こもの陸地あくはなるべきを、欲ふまひひ海上のちろをもしを生雑
風ふあるくこ宿と夫ふ人はくあり旅中むしはしむべきなり

○連なる紀旅を夜をおのしを早く出立べうらぶ

船の早くはくタはまるくとまるべくはなるまべ作もまるはゆくとのあり、
船おるくはいまり作旅をすり

○水をのむべうらぶ。菌もべくく珍らしき食物を食らべうらぶ

○旅中を悉く敵地とうろく少しも油断もべうらぶ

おりてふ雷丸をもはてくいうちい事おるこくおるもべくの物をまめやふ
うくしらべ祇えまはおくべくいろふもむくくもめしりをうべうくもを一
怠慢をはしおこ毒のおそもあり怠慢をはどれば後用ふどうせうう
ありつくむべ

○あくき草鞋をもやくぬきうゆべし

こくくはは價をおくまもぶんはうちをまくべくを雑は旅人の甲
冒也こくくあくはあくはるる一安もまとべうくし

○昼の食事を一二杯法〻食ひ。空服まなくべい〻なも少〻づ〻食ふべし。大食をもまび道をゆきうたし。

○小休の時。オンアトミソハカ〻と三べんづ〻唱へ〻その席をたつべし。かくもれば物をもそわぞ

[illegible]

○夏の旅を馬に乗べく〻べ

なの馬も蠅はらへ〻むまあのづ〻あらし、あるいは必睡眠をもふもの。のふり、あふなるふのまびこ人多し

○草卧く馬に乗るい大なる損あり。馬も駕まを朝のうち乗べし。朝を價も安し。昼より後泊りの驛程ちりけまび。足のもこびもおのづからもろどりくもむもあり。ちりまども紙のうち足をやもませなぐまび。草卧格別みくもよう日をめ〻

用ふたちぐたし。出立より五六日めみくもまどめくあしめさなまるもたぐろし。馬はつめくあまもび疝氣を生ぐこれ玄馬と異しくあり。鞍上ふ穩まあまり

この記世ふもちあるべきもちぢあ紀ふしもあるねび ひめく窓外ふ出もちくあし。さまを近曾書肆何ぐしが強く請ようく。

この内數條を拔萃して三冊とし。蓑笠雨談と名ばもて刊行せ。已下ちなは人のえる事と許さぐ。後もまさかてなるべし。

ヨガ子ども等。板せんと乞ふものあるとも許せみとあるれ。

正幹曰。これ予が翁の遊歷の道もぐらかりそめふ物せちもたる筆記ふく。のもまより鷄肋のやうなたぐひあれど。そが中ふを。當時風俗の美惡。人物は批評ふと。何らもとふくかいつけたまび。世ふ憚ふとなりとて。板行とび許さざまし。翁の用心もまたをふとむべし。あるいあまど。物換

り時移り。文明の御代あゝあまべ今もて悼るべきあとゝゝ
いのらざるべし。かゝゝ文字を校訂し。世まも示さぞやと
思ふ折しも。書肆畏三堂主あるゞ。こと梓ませんと乞ふま
まうせ。やどゞ三巻の冊子とゝあゝぬ。さまべとて。かくも
うあき筆のきさひを。世まこゝめゝしうせんこゝにゝあらぞ。
たゞ予が姻族のこゝのふるそのち。翁を慕ふる人ゝも見せん
こゝぞ。心ゝらひよりせゝおとあまべ。翁の素志またゞゝり
あど。世の誚を得るまとゝるも。そゝいさゝか辞せざること
ろなり。

羇旅漫録巻の下終

男子の業まを未見ぬ書籍を閲ん
こゝをおもひ。旅ゝあゝゝい未ゝの山川
まを遊んこゝをおもひ。志のゝ。あなゝゝな
きこゝかゝ。寛政庚申。年三十四歳。
九月中浣。冥相の翁ゝ遊歴ま。九月十日発江戸
先づ武州金澤を遊覧し。浦賀の友
を訪ゝ。室ゝ下田を渉る。相模灘三十
餘里。一日難風まあゝて船押ゝこゝる。
九月下旬ゝいゝゝ下田ぬ港ゝ遊ゝ

十日許(バカリ)。帰路連屋多く湿あり。天
堪六里の山中を越え。天堪山六里 問無人家 湿り甚しき
旅疲れ。三嶋沼津の友人を訪ふ。相
逢ふ事未だ久しからず。杖を引き鎌倉に曳
く。神々十五日家に帰る。洛東百餘里。
路程猶ほ遠し。然れども歩きてあれば安
若し。如何。豊臣秀吉公箱根を越らる。
よりて歌ふ。箱根。はるかに
しと。志ろしめす。
文事ありて百日の行あれども僅に一夜
の旅程あり。命と時とふつながら
ひたり。かくて出て行脚なるべし。
古人曰ありこと疑なし。

人生宇宙間。志願當何如。不行
萬里路。即讀萬卷書。

享和二年壬戌冬十二月二日

著化堂馬琴再筆

明治十六年三月八日版權免許
同　十八年五月　出版
同　年五月二十日製本改御屆
定價金九拾五錢

著者　故人　曲亭馬琴

校訂兼出板人　東京府平民　渥美正幹
四ッ谷區四谷尾張町八番地

著者相續人　同府平民　瀧澤次
麹町區飯田町二丁目三拾貳番地

製本所
發賣人
書肆畏三堂
須原鐵二
日本橋區西河岸町拾二番地